

70年の時差

—— 伊勢原市・戦争体験者インタビューとワークショップ ——

水島久光

70-year time difference ;

War experiences interview and workshop in Isehara City, Kanagawa Pref.

MIZUSHIMA Hisamitsu

Abstract

This paper is a record of war experience interviews and workshops as a joint project of Isehara City, Kanagawa Prefecture and Tokai University Mizushima Laboratory, and a consideration on the possibility of passing the testimony of the Asia - Pacific War from the results.

By 70 years since the end of the war, the testimony by the voices of war experiences became extremely difficult to obtain. But more than that, today's situation where public opinion is distorted historically shows that there was a structural discrepancy between the witness's word and its recipient from the first place .

We examined the interviews of ten people conducted from 2015 to 16 and the workshop using the video record from the viewpoint of communication success or failure, and the semantic interpretive or psychological occurred between the war experienter and the university student A gap was precipitated. We will consider the possibility of filling the groove.

1. 伊勢原市戦争体験者インタビューの実施

1-1 戦争体験者インタビューの狙い

神奈川県伊勢原市から、「戦後70年」を機に、市内在住あるいは市出身で近隣に住まうアジア太平洋戦争体験者のインタビュー収録事業の呼びかけがあったのは2014年9月であった。筆者は2005年の「戦後60年」の8月に戦争関連番組を録画し、私的にアーカイブを構築し分析をするとともに、そのナショナルなコンテキスト（あるいはフレーム）と対比すべく、鹿児島県大隅に赴き、地域の戦時記憶について研究を行った経験があった。それから「10年後」という

タイミングでのオファーであり、また学生とともに実践を行う教育効果も期待できることから早速作業にとりかかることとした。

既に「戦後60年」時には、戦争体験者の生の声による「証言」が得難くなっていること、そして何年か先にはそれを聴くことが全く不可能になることに対する危機感は十分に高まっていた。それ以降「戦争を語り継ぐこと」は一種のブームとなり、数多くの「証言記録」が残されるに至った。高齢化社会は、その危機を若干先送りさせたが、むしろそのことによって課題は「語ること」そのものよりも、その内容をどのように理解し、活用するかという「受け取る側」にあることが明らかになってきたと言える。

近年、かつて戦争体験を基点に培われてきた我々の戦後の精神風土は、次々とその脆さを露呈するようになった。「現実主義」を標榜する人々による、歴史を軽視するような発言が広がる背景には、戦争体験者による「証言」の集積が、たとえば悪いが不良在庫化していることの表れに他ならない——すなわち、きちんとその声が社会に流通しない構造的問題がそこにはあるのだ。

ゆえに本事業においては、インタビューの映像資料化をその「数」で評価するのではなく、作業を通じて、体験者の「語り」と「聴く者」の理解をつなぐ方法、戦争が実際に行われた時代の「リアル」を、世代を超えて共有する方法の模索を目標として定めた。その作業は、i インタビュー実践、ii 記録化、iii 活用の三つのステップを想定し、各々において、かつ相互に仮説－検証を反復しえるように設計された。

1-1-1 コミュニケーション実践としてのインタビュー

まずi インタビュー実践について。ここで留意されたことは「語り」の一方向性をどのように批判の対象としうるかである。戦争体験者の「語り」の多くは、これまでは専ら体験者から非体験者へ一方的に「伝達」されるものとして扱われてきた。実際に伊勢原市でも「講話」という形式でこれまでもその機会は設けられてきた¹。今回の事業においても、インタビュー（以下「語り手」と呼ぶ）候補は、はじめはかつての「講話」登壇者の中から選ぶことになった。

ここで我々は、既に「講話」録が残されている人のインタビューを、なぜ改めて行うのかという問題にぶつかる。その議論から浮かび上がったのが、「戦争体験インタビューにおいて、批判は如何にして可能か」という問いである。戦争体験はこれまで「語り継ぐ」ことが自明とされてきた。その「証言」としての希少さが、批判的な眼差しを押し殺し、「襟を正して聞く」非対称な関係を「受け手」に要求してきたのである。それはともするとそのナイーブな「信頼」が裏切られたとき、オール・オア・ナッシングのバッシングに晒されることになる——多くの戦時証言において我々はそうした不毛な評価の「手のひら返し」を目撃してきた²。そうではない、もっと生産的な、社会史的解釈は不可能なのだろうか。

往々にして「講話」を繰り返し「語り部」となった戦争体験者の言葉は、「物語」へと固着していく。非常時としての出来事がクローズアップされ、それに「悲惨さ」「もう二度と犯してはならない」などの常套句が添えられることで、象徴化、ステレオタイプ化が進む。もしか

するとそれは、戦争を知らない世代の受容を妨げてこなかっただろうか。もちろん想像を絶する経験を持つ人々が、できれば個人的な記憶に封じ込めておきたい感情を乗り越え、それを言葉にする行為そのものには、最大限敬意を払う必要があるのは当然のことだ。しかし、無批判にそれに向かうことは、その価値を「発話行為」（話す行為の価値）のレベルに止め、「発話内容」に踏み込むことを阻んでしまうのではないだろうか³。

先に挙げた「手のひら返し」に見られる「真偽の単純化」の対象となってしまうたら、それこそこれからさらに希少化が進めば、歴史資料としての十分な検討がなされないままお蔵入りの危険性もある——そういったリスクも見通したうえで、今回のインタビューの方法を策定していくことになった。留意した点は以下の三点である。

- ① インタビュアーを大学生が務め、対話の困難さに敢えて向き合うこと。
- ② 日常と非日常、戦前と戦後を連続した時間として捉えること。
- ③ 共通した質問を用意し、記憶の多様性を記録すること。

終戦から70年を過ぎた今日への隔たりは大きい。そこで聞き手を20歳の大学生が務めるということは単に半世紀以上の時間の経過だけではなく、その間の社会規範や生活環境・文化の違いに直面するということを意味する。それは「勉強不足」とか「世代差」という言葉に回収されてしまうことで足りるものではない。しかし、それと同じように戦争体験者たちもまた、現代社会における違和感、理解しがたさを抱えて生きてきたのではないか。これまでは一方向的な「講話」というスタイルの中で、見逃されてきたことではあるが、その点に虚心に向き合うことなくして、「語り継ぐ」ことの前提となる相互理解は得られないのではないか。

すなわちこの事業においては、インタビューを一つの「コミュニケーション実践」として捉えることとした。もちろん学生たちにはインタビュー前の予習、あるいは「講話」の記録や関係資料、市職員がアポイント時に行った事前ヒヤリング資料の読み込みなどを行い、それをもとにシナリオ（質問の流れ）を作成して臨むように促した。しかしそこにおいて指導教員として介入したのは主に②、③の点のみである。当然、現代の若者のボキャブラリーにおいては、まるで外国語のように知らない言葉や事象ばかりであろう。しかしそれを、双方がその「差異」に気づくチャンスと見なし、大切にしようと考えた。

1-1-2 戦時の日常を現出させる

②、③の留意点については、iiの記録化のステップで行う作業仮説と深く関わっている。これまで行われてきた多くの戦争体験インタビューにおいては、（一部の「ドキュメンタリー番組」などで用いられるもの以外では）「語り手」の経験の個別性に重点が置かれてきた。それは、例えば「原爆」や「沖縄戦」、「シベリア抑留」のような象徴的なトピックにおいて、何人かの証言を重ね合わせ「事実」を浮かび上がらせようというアプローチはなされたとしても、それらの言葉を「まとめ」として認識するベースは、個々の「語る主体」に置かれてきたことには変わらない。

我々は、今回の事業はややそれらと「前提」が異なることに注目してみた。それは基本的に、この「伊勢原」という町の特性からくるものである。今日でこそ東京郊外のベッドタウンであるが、小田急線沿線の旧伊勢原、成瀬、比々多地区を除けば多くは農村であり、また北部は大山阿夫利神社の存在に根差した信仰の地であった。確かに南部は海軍工廠を抱え、のちに大空襲に見舞われる平塚市と隣接はしていたが、一般に言われる「都市空襲」の直接的なターゲットにもならなかった「普通のまち」である。こうした地域で語られる戦争の記憶においては、ある意味、象徴的な戦史の舞台とは異なるアプローチが可能であろうと考えたのだ。

それは「戦時の日常」のリアルを現出させるというものである——10年前、「戦後60年」時に行った筆者の研究では、収集した特集テレビ番組の多くに、ナショナルなパースペクティブが刻み込まれていることが見いだされた。そして当時、そのフレームの自明性を検証の対象とするために、鹿児島に赴き「消された出来事」としての「第六垂水丸遭難事件」に関する記憶の掘り起こし作業を進めることになった。結果、そこで得られたものが「戦時の日常的心性」の仮説である⁴。

一般的に、戦時の象徴的トピックにおいては、生死の緊迫、理不尽な判断、行為の異常性がクローズアップされ、それが「戦争の悲惨さ」という評価を伴って常套句化される。しかしそれはあくまで知覚可能な時空間の一部にすぎず、切り取られた断片にすぎない。「図と地の論理」でいうならば、「図」の突出性は、「地」とのコントラストによって認識の輪郭を獲得する。ゆえに／その一方で「図」はその位置を保証する「地」とは切り離すことはできない——この関係の両義性は、立体的な対象認識においては決定的な要素といえよう。にも拘わらず、これまでの戦時記憶の語りにおいては「図」の部分ばかりが過剰に強調されてきた。あるいはドキュメンタリーやテレビドラマの場合は、「地」は描かれてはいても、それはあくまで一般的には「図」をクローズアップするための「導入」としての意味あいしか与えられてこなかった⁵。

この事業においては、それとは逆に、むしろ積極的に「地」に光を当てていくこと、それによって戦時生活の「日常」に迫ることを目標に掲げた。これまでの多くの「証言」においても、「いつの間にか、戦争が激しくなってきた」「気がついたら、取返しがつかないことになっていた」といったことが語られてきている。それは戦争を下支えする要因が日常を装い生活に侵入していたこと、言い換えれば異常事態への馴化であり、それが可能だったのは（東日本大震災などでも注目された意識である）強固な「日常性バイアス」の存在があったと考えられるからである。

我々はこれらの仮説を前提にして、本事業のインタビューの設計図を引くことにした。そこではいきなり「戦争の記憶」を問うのではなく、まずは「家族」「仕事（従軍した方には出征以前の）」「生活（特に衣食住や、遊びや祭りなど日常の楽しみ）」といった一般的なことから尋ねることとした。またなるべく「戦争」は、その方のライフヒストリー（個人史）のコンテクストの中に置くことに留意し、特に「戦後」についても十分な時間を割き、戦前～戦後の変化についての認識も、「20年8月15日の記憶」を核に、丁寧に尋ねることに留意した。

さらには「語りの物語化」に抗する意味で、インタビューには可能な範囲で「もの」の持参を依頼し、対話をしながら「想起」を促す機会も設けるようにした。そして質問の最後にはか

ならず「現代の若者に対してのメッセージ」を訊ねた。そこには普段からの思考の底にあるイデオロギー的無意識や、現代的生活への違和感や「世代間ギャップ」へのメタ意識が表れると考えたからである。

さて問題は、このインタビューをどのように記録化するか、である。ここでは我々は、複数の語り各々の固有性を相互の関係性（全体における位置関係）の中で捉えられるように「アーカイビング（構造をもった記録の集合体として保存）」することを試みた。実際、戦後70年の段階でインタビュー可能な対象者の年代は10歳前後（終戦当時小学生（国民学校生））～20代後半までの広がりがある。もちろん男女の違いも大きく、従軍期の記憶と戦後の生活の記憶にそれらは分かれるだろう。また「日常生活」に視点を定めるならば伊勢原市内の各地域によっても違いが生じる。我々はこれらを「構造を有した記憶」として捉え、異なる「語り手」の共通部分を重ね合わせられるように、事後的なメタデータ付与を想定し記録化を進めた（実際の作業は2017年度の課題）。

とりあえず現段階では、ii 記録はA インタビューそのものの全体映像 B 主要素を抜き出した（一人あたり約20分）のアーカイブ映像素材の映像記録二種類で、Bを再編集し様々な活用できるようテキスト化し、そこからメタデータ要素を抽出できるようにしてある。

1-1-3 活用の次元—いかにして「戦時記憶と出会うか」

インタビューの場合、実際に「語り手」とのコミュニケーション関係に入れるのは、直接の「聞き手」だけである。仮に、その間でこれまでの「戦時記憶の語り」では重視されてこなかったインタラクションが可能になったとしても、その段階でとどまってしまうと「伝承」はやはり一方向的なものに回帰してしまうだろう。したがってiii活用の次元では、その広がりを如何につくることができるかが主題となる。

活用の最初のステップは、上映会用映像の編集である。「語り手」の言葉を直接ではなく、第三者によって解釈し切り出す行為は、コミュニケーション関係を広げる手続きの入り口にあるものといえる。但し、そこには「受け取る側」のメディア・リテラシーが必要となる。編集後の映像を単に「出来上がったもの」として正対して視聴するだけであれば、それは一方向性を再生産するにとどまってしまう。双方向的関係の拡張を図るには、解釈の多様性を生む契機をそこに差し挟む必要があるのだ。映像メディア、あるいはそれらを上映する「場」は、こうした「間接性」を担保するチャンスとして位置づけられる。

毎年8月に開催される「伊勢原市平和の集い」には、そうした「活用の次元」を市民に拓くものとして重要な位置づけが与えられる。2015年には、まずはインタビュー映像をこの機会に上映する作品として編集した。加えて、2016年には後述の「ワークショップ」が企画された。「平和の集い」では、インタビューを契機に提供された様々な「往時のもの」が展示されている。また、このインタビューとは別の事業であるが、市内の中学生による平和学習の一環としての広島訪問学習の報告もなされている。まだ、これらの活動は「点」として並べられているにすぎないが、今後は徐々に相互の有機関係がデザインされ、「戦時記憶との多様な出会いの場」として形づくられていくことが期待できる。

一方で、「平和の集い」のような時間・場所が限られたイベントだけでなく、常時こうした情報にアクセス可能になることも大切だ。そのためにはデジタル・アーカイブ化が志向される必要がある——その構築も今後の重要な課題である。アーカイブとして公開されると、人々の「戦時記憶」との出会い（特に8月に集中する）「メモリアルデー」から、日常に解放されうる。また、そうした特別な機会に会場した人々に限られず、さまざまな問いを投げかけることが可能になる——その一つの将来像が、学校教育、社会教育における「学びのデザイン」である。その意味で、上記の「ワークショップ」をいかに継続していくか、あるいは中学生の「平和学習」にこの事業をどのように接続していくかも、今後、しっかり検討していかなければならない⁶。

2. インタビュー実施結果

戦争体験者が、言葉にしにくい記憶を口にするという行為には、何よりも敬意をもって向き合うべきではあろう。しかしそれは発言内容を絶対的なものとして受け止めることとは違う。むしろ「証言」が貴重になっているからこそ、インタビューの過程で、都度聞き手は「解釈」を差し向け、リアルタイムに語りを検証しながら対話を進める必要がある。

本事業で学生が聞き手を務めることは、リスクでもありチャンスでもある。1990年代生まれの学生にとって、戦前世代が用いる語彙、特に軍事用語や戦時生活に関わる名詞は全く馴染のない「外国語」のように聞こえるものが少なくない。これをそのままにしてインタビューに臨めば当然対話は成立しない。先に述べたように、ある程度の「予習」は行って臨んでも、辞書的な理解だけでは、コミュニケーション実践はうまくいかない。しかし今回は、あえてその「躓き」——「質問が通じない」「答えが理解できない」という「双方が戸惑う」状況に、積極的に注目した。この「ギャップ」状況こそが、戦争というコンテキストが孕む言語化しにくい何モノかを浮かび上がらせるチャンスなのだ。

「家族のこと」「衣食住、遊び、祭などの行事」「戦後から今日に至る生活の変化」などに関する質問を次々繰り出す学生によって、語り手の「準備された“戦争”の記憶」は、あきらかに揺さぶりをかけられた——そこに立ち現れたのは特定の「出来事」にフォーカスせずに、「記憶」のバックグラウンド——身体化した規範、社会常識、イデオロギー等々、個人の記憶をそのまま記録化していくだけではおそらく可視化されないであろう「空気」である。それは、インタビューの場に次のような現象を生起させた。

- ・対話によって「これまで他人に話したことがなかったことがら」が口をついて出る。
- ・学生たちとの解釈のギャップに戸惑うことによって、語り手自らが「戦前・戦中」に自明としてきたことを意識化し、メタな語りが増える。
- ・証言者の世代に共有された「規範」に対する従順さ、その「規範」が崩れた時の「思考停止」の実態が浮き彫りにされる。
- ・「終戦」の認識、あるいは戦後培われていく「反戦」への意志の多くが、比較的ナイーブな感覚的言葉（恐怖、安堵、嫌悪感など）によって語られる。

——すなわち総じていえば、これらは「証言者」の無意識に食い込んだ結果である。

この点について思い出されるのは、元NHKプロデューサーの桜井均の10年前の指摘である。著書『テレビは戦争をどう描いてきたか—映像と記憶のアーカイブス』（2005、岩波書店）において彼は、「戦争の記憶を語ることのモノローグ性」について問題提起をした。つまり戦後しばらく体験者の語りは「他者」に向けては発せられていなかったというのだ。今回、実際にインタビューを行ってわかったことは、その傾向が今日もなお続いているという現実であった。さていよいよ、今回の一人ひとりの語り手についてその内容をみていくことにしよう。

2-1 10人の「戦争体験」と「戦後」

以下、2015年～16年に実施した10人のインタビューのアウトラインを記す（日付はインタビュー実施日）。詳細は映像を参照して欲しい。尚、氏名はイニシャルのみの記載とする。

(1) KN氏（男性、インタビュー2015年1月22日実施、大正12（1923）年生まれ）

厚木市酒井生まれ、養子で伊勢原市下谷に。ミッドウェー海戦で左足を負傷。一時除隊後内地勤務（瀬谷の弾薬庫～木更津の航空隊）、木更津で終戦を迎える。戦後「傷痍軍人会」で活動。数多くの講話を残している。足に受けた銃弾など資料持参。

- ミッドウェー海戦時足に銃弾を受け、現在もその破片が残り痛むという。これまでの「講話」はその経験をもとに語られていたが、このインタビューでは敢えて「家族」のことから質問を始めた。自身「養子」であるということを語ったのは、今回が初めてという。
- 一時除隊後の瀬谷、木更津での経験（瀬谷：部下が弾薬泥棒へ行った制裁、木更津：航空兵たちの暴動、上官への復讐等）は、かなり生々しい告白であり、軍隊の中の「日常」、リアルな「規範意識」を知る上で重要な証言といえる。
- 「一人前になったら兵隊になる」という考えがいかに浸透していたか、当時の思想教育の強い影響を強調。

(2) YM氏（女性、インタビュー2015年2月3日実施、昭和11（1936）年生まれ）

伊勢原市大山生まれ（旧姓K、当時は大山村）。父は比々多小教諭。長女として母を助け、弟妹の面倒を見る。川崎から大山に疎開に来ていた小学生が被弾し亡くなった記憶、終戦の日前後の記憶が鮮明。「講話」だけでなく多くの手記を残している。「黒塗り教科書」など資料持参。

- 語りの端々に厳格であった「父の影響」が強く表れている。家族への責任感や儉約、さらには他者や社会に対する態度に至るまで、その強い規範意識は徹底しており、戦後の人々の意識の変化、特に同性である女性に対し厳しい目を向けている。
- 表現は非常にリアルで、自らには差別心はなかったことを言いつつも、疎開者の身なりや被弾した小学生の遺体の凄惨な描写などには、ある種の冷徹さも感じられる。しかし当時の彼女の年齢を考えると、これらの表現は戦後「講話」や「手記」を書くうちに上

書きされたものとも考えることもできる。

- とはいえ、戦前～戦後にわたる衣食住や近隣住民との交際に関する詳細な語りからは、銃後の生活を支配していた価値観をかなり鮮明に読み取ることができる。

(3) T Y氏（男性、インタビュー2015年3月17日実施、昭和9（1934）年生まれ）

目黒生まれ、終戦前年に伊勢原東大竹に縁故疎開（父の実家）で転居。『週刊少國民』『こども朝日』『野球少年』等の雑誌資料を市に寄託。郷土史家として多くの研究発表を行い、講演も行っている。

- 都会育ちであり、また郷土史家としての性格なのか、「田舎暮らし」や「大人」に対しやや距離を置いたクールな目を持っている。
- 寄託した雑誌（『週刊少國民』を定期購読することになった経緯）のエピソードなど、当時のメディアや情報環境についての発言は貴重。また戦前～戦後における物資（配給）の状況などの記憶が鮮明。
- Y M(2)氏、O T(9)氏と年代、居住地的にも比較対象可能な記憶が多い（後述：川崎からの疎開小学生の被弾、終戦の日の記憶など）。

(4) I S氏（男性、インタビュー2015年3月17日実施、大正7（1918）年生まれ）

伊勢崎市石田生まれ。台湾、中国からフィリピンへ輸送部隊として転戦。ルソン島で激戦を経験する。高齢で耳も遠く、またインタビュー当日は体調も崩しており、自分の現在の年齢も定かに答えられず、同じ答えを繰り返す状態であった。写真は数多く所持。

- はっきり答えられていたのは、ほぼルソン島での物資輸送における記憶のみ。但し、戦闘というよりほぼ「物資の奪い合い」の夜襲が頻発していた状況を証言。
- 中国戦線時代の記憶も定かではない一方、ルソン島については地名も鮮明。戦後の記憶は促してもほとんど言葉にすることはできなかった。

(5) Z H氏（男性、インタビュー2015年5月21日実施、大正15（1926）年生まれ）

秦野市生まれ。飛行機に乗りたくて少年飛行兵学校に入る。台湾から厦門を経由し、終戦はクアランプールで捕虜となっていたときに迎える。半年後、最初の復員船で帰国後、米軍厚木基地で無線技士として働く。当時のものは全く持っていない。

- 記憶が鮮明。海軍航空隊時代のこと、部隊名やその動き、特に特攻に関することは今でも具体的な説明ができる。捕虜時代、復員後のGHQとのやり取りや状況描写についても克明で、文字通り「証言」に値する「語り」といえる。
- その一方で所謂「悲惨」な、あるいは「恐怖」体験談は少なく、敗戦に対しても「悔しい」「(敗残兵で) 恥ずかしい」思いが強い。しかし戦後社会に対しては、「命を守る」現行憲法順守を主張。
- 純粋な「飛行機好き」の少年のまま戦争を経験し、歳を重ねた印象。今でも「哨戒機の音を懐かしく思う」一方で、除隊後家に帰れず半日「秦野の震生湖で」思案に暮れ、翌

日帰った時の母や父の姿を思い返して、声が詰まるなど。

(6) KM氏（男性、インタビュー2015年6月25日実施、大正7（1918）年生まれ）

山北町で国鉄職員一家に生まれる。電気学校（現東京電機大学）卒業後徴兵。その後ずっと通信兵として従軍。中国を転戦後一旦除隊。一年後（太平洋戦争開戦前に）再び招集され電信隊員として再び中国、そして南方戦線へ。現地残留で復員は遅れる。慰問袋や当時の地図など、資料多数。

- 高齢のため、中国と南方戦線の記憶が混ざることもしばしばあったが、個々の場面は非常に緻密な描写で、前線の状況が映像を見るようにドラマティックな語りであった。前線における通信兵のポジション（狙われにくい一方、情報にも通じていた等）、駆逐艦沈没の様子、従軍慰安婦と兵士との関係、戦地に取り残された状態でどのように生き延びたか（食生活）、復員船における上官への仕返しなど、生々しい「証言」内容多数。
- 持参した資料も貴重なものが多く、寄せ書き、餞別の記録などは出征の様子を彷彿とさせる。中国転戦時はカメラをもち記録を残す余裕があった。
- 「戦後」についての記憶は希薄。反戦の気持ちは口にしても、滅私にて国に奉ずることを「義」と考えている。

(7) YT氏（男性、インタビュー2015年12月9日実施、大正14（1925）年生まれ）

伊勢原市比々多（旧比々多村）の農家に生まれ、高等小学校卒業後小田急勤務。昭和19年に召集令状で通信隊入隊。釜山から新京に着任。ハルビンで終戦を迎え、牡丹江に移動中にソ連兵に捕まりシベリアに抑留、4か所の収容所を経験。帰還は昭和23年。

- 志願兵ではない立場での隊内での理不尽な仕打ち、ハルビン脱出の様子など生々しい描写が数多いが、それ以上にシベリア抑留中の出来事の異常さ（同僚の死、人肉食など）は際立つ。
- 一方、それを淡々と時にユーモラスに語る氏の様子は、異常さの日常化の極限を生きた人間のリアリティそのものである。また、抑留中のソ連兵との交流や、抑留前の満州での情報入手のレベルなど貴重な「証言」も多い。
- 19年暮れの入隊で、戦争が激しくなってしばらく内地にいたことや、志願兵ではないことなどのためか、記憶も前線に集約されることなく、戦前～戦後の印象をまんべんなく語った。

(8) KF氏（女性、インタビュー2016年2月2日実施、昭和8（1933）年生まれ）

伊勢原市沼目（旧大田村）生まれ。旧姓尾崎。農家で酪農もやっていた。終戦当時は小学校六年。平塚に近い場所柄、空襲の実体験が多い。軍隊の駐留、疎開者、勤労奉仕、食生活などの戦後の生活の記憶が鮮明。

- 特に自宅が空襲を受け、牛小屋が被害を受けた描写が克明である。また駐留していた兵士との交流や、学校行事として開墾が行われていた様子など、戦争が激しくなって以降

の村の様子を語りから具体的にイメージできる。

- 終戦時～戦後の様子についても、比較的連続性をもって答えている。
- 「欲しがりません、勝つまでは」のスローガンが当時の倫理観と空腹の経験が混ざり合って強く残っている。「古い観念にとらわれている」ことを自覚しつつも、現代の若い世代との価値観のギャップには立ちを隠せない。

(9) OT氏（男性、インタビュー2016年6月28日実施、昭和6（1931）年生まれ）

伊勢原市東大竹生まれ。実家は鍛冶屋。終戦時も小学校にいたというからおそらく高等小学校と思われる。空襲の直撃を受けた経験があり、記憶は生々しい。戦時中自分で拾得したもの（薬莢、銃弾など）に加え、戦争関連の資料を戦後数多く収集し、市に寄贈。

- 比々多の変電所が空襲の標的とされたときに、至近距離で銃撃を受けている。その分空襲の印象は強く、防空壕掘りや薬莢拾いなど、それに結びついた記憶が鮮明。
- 「遊び」についての記憶が鮮明。チャンバラや戦争ごっこなどから、「飛行機乗り」にあこがれていた当時の少年の心性をうかがえる。
- 収集癖は性格か。記憶も「モノ」に結びついたものが多い。終戦の記憶や戦後の暮らしについては特に強く主張することは少ない。

(10) SH氏（男性、インタビュー2016年7月8日実施、昭和2（1927）年生まれ）

終戦時は横浜にいた。横濱商業を昭和19年の1月に繰り上げ卒業後、石川島航空工業へ入社し、零戦の発動機製造に携わる。昭和20年5月29日の横浜空襲を経験。戦後、英語が堪能であることを買われ駐留米軍に勤務。手記多数。

- 横浜市内に暮らしていたこともあり、戦時経験も伊勢原の農村に暮らしていた人とかなり違う。空襲経験も。
- 話題の中心は「戦後」。特に、駐留米軍内での経験、米兵との交流については氏の価値観に大きく影響を与えたものと考えられる。

2-2 「体験談」と「体験談」の関係

まずこれらのインタビューを軍隊経験の有無により大きく二つグループに分け、各々の語り手の言葉が重なるところ／コントラストが表れるところを抽出してみたい。

「有」はKN(1)、ZH(5)、KM(6)、IS(4)、YT(7)の5名、「無」はYM(2)、TY(3)、KF(8)、OT(9)、SH(10)の5名とちょうど半々に分かれる。この境界をなすものの一つが「ジェンダー」である。「有」グループは全員男性であるのに対し、「無」グループには2名の女性を含む。もう一つは「年齢」である。「有」グループは終戦時の年齢が19～27歳、一方「無」グループは10～18歳とはっきり分かれる。このことは、これらの「体験談」が、戦前社会の構造を反映したものであることを示唆している。この中には「有」グループと対照されるべき年齢の女性の声がない。また、軍隊に所属しなかったとしても何らかの理由で戦地を経験した者（従軍慰安婦、一般の大陸引揚者、沖縄や領有地住民等）の声もない。その点は十分考慮したうえで、

各グループの「体験談」の特性を見ていく。

2-2-1 YM(2), TY(3), KF(8), OT(9)——重なる銃後の記憶

※「無」グループは先に述べたように5名であるが、SH(10)は当時伊勢原で生活しておらず、また年齢的にも「有」グループに近いので、分析においてはこのグループから外して考える。

この4名の「語り」には共通する要素がいくつも見られるが、中でも「疎開者の受け入れ」と「空襲経験」は、この伊勢原という町における戦時記憶を特徴づけるできごとだと言える。

川崎からの「疎開者」についての言及は、YM(2), TY(3), KF(8)のインタビューに表れている。大山、東大竹、沼目と地域が異なるため別の学童であったと思われるが、伊勢原を始めとする神奈川中西部は、広域で都市部からの集団疎開を受け入れていたことが伺われる。疎開についてはする側も受け入れる側にも、「なじめなかった」ことがもどかしい記憶となって残っている(KF(8)の発言には、その点は希薄)。集団疎開はある意味「村の生活」からは切り離されたものであったが、(TY(3)自身そうであった)縁故疎開についても「疎外感」はあったという。実家が農業であったか否かも含め、このあたりのバリアの要因には注目したいところだ。

「空襲経験」については、現市内でも相当に違いがあるものと思われる。海軍工廠のある平塚市と接する伊勢原地域は、空襲の標的になることは少なくともその直接の影響下にある。その心理が「語り手」の住まいの平塚からの距離感とともにグラデーションを描いている。TY(3)とOT(9)は住まいが近いので、同じような空襲経験を有している(記憶している亡くなった人の名前は異なる)ことはわかるが、大山小学校で起こった疎開児童の被爆について、当事者に近いYM(2)とともにTY(3)がその記憶を有していることは興味深い。TY(3)が住んでいた東大竹と大山の距離を踏まえれば、当時の情報の伝播がどのようなものであったかを想像することができる。

またYM(2)とTY(3)は、「終戦の日の記憶」についても共通の印象を語っている。それはその日の夜の「灯り」である(YM(2)「電球の覆いをとった」、TY(3)「小田急線がたくさん電気をつけて明るくなった」)。玉音放送の経験については、濃淡さまざまな答えがあるだけに(YM(2): 父の誤解/KF(8): 2~3日前に知っていた/TY(3): 聞いていない)、庶民レベルの「終戦の実感」は、本来はこのあたりの生活感の変化を中心に探るべきなのであろう。

インタビュー全体を通していえることは、当時4人とも小学生であったにも関わらず、語る内容にジェンダー差を明瞭に見て取れるという点だ。女性は早くから家事労働の担い手として見なされており、発言の中に「儉約」が倫理観の中心として強く表れているのも、その影響と思われる。生活に「遊び」の要素が乏しく、その分強い規範意識がアイデンティティを支えることになっているようだ。一方男性は、同じ「貧しさ」を体験していても関心が「配給」や「取得物の換金」といった「家事の外」に向かっており、生活に「遊び」の要素もある。たまたま今回の語り手の性向ゆえのことかもしれないが、男性の方にややクールに物事をみている印象を受けるのは、そのためかもしれない。

2-2-2 KN(1), ZH(5), KM(6), IS(4), YT(7)——戦地の記憶と出征兵士の心理

軍隊生活経験を、戦後70年経ってまだこれだけ聞けるのかという感慨の一方で、さすがに90歳を越えた方々の「語り」には、受け止めるのにさまざまな困難が伴った。特に100歳に近いIS(4), KM(6)は、記憶の断片化も進み、また質問に対する応答や、語る出来事の順序・対応関係にも不安定さが見られた。しかし明瞭な部分だけを抜き出すかたちであっても、十分「証言」としての価値の高いものであったといえよう。

軍隊経験といっても一括りにはできない。5人にはそれぞれ異なるキャリアがある。志願兵であるか否かによってもその経験に大きな違いがあるが(YT(7)は令状による召集, KM(6)は早期徴兵。除く3人はおそらく志願兵)、特に専門職能を身につけた者の経験は、職種の影響を強くうけ、「語り」にもその要素が多くなる。と同時にその内容は、軍隊という組織のメカニズムを知る上で貴重な「証言」でもある。また各々の転戦経験(多くは中国大陆～南方)の記憶は、戦局の推移と対応しており興味深い。

それぞれに前線での生々しい記憶が語られた。特にKN(1)の香港での経験(水に浮く死体), KM(6)の沈む駆逐艦の描写や従軍慰安婦の様子についての語り、あるいはYT(7)のシベリア抑留時の人肉食など、「証言」としての事実性よりも、印象に残るのは、これらの「体験」あるいは「見聞きした」ことがらを淡々と、時にはうす笑いを浮かべながら語る彼らの表情である。それだけでも「生死」の境界線をどのように経験してきたのかを、うかがい知ることができる。

軍隊の内部の様子についての「証言」もある意味生々しい。共通するのは制裁の理不尽さとその日常化であるが、戦局の悪化、そして終戦とともに秩序が破たんしていく様子がそれぞれに語られている(KN(1)が経験した瀬谷弾薬庫盗難事件, IS(4)が繰り返し訴えたルソン島での「夜襲の恐怖」など)、また同じくKN(1)が木更津の航空隊で、あるいはKM(6)が復員船の中で目撃した「上官への復讐」は、おそらく広範に起こっていただろうことが想像できる。またこのような異常な毎日の中でさえ、ささやかな喜びを見つけようとする人間らしさもZH(5)のマレーシアでの捕虜生活, KM(6)が放置されたニューギニア, YT(7)のシベリア抑留生活の語りには読み取ることができる。

彼らは口々に「もう戦争はしていけない」と語るが、特に志願兵経験者には、「国に身を奉じる」規律が身体化している様子が垣間見え、その根拠は必ずしも論理的に語られてはいない。ZH(5)のように「航空機へのあこがれ」をそのままこの年齢になるまで抱き続けている人もいる。「終戦」、あるいは「戦後」の人生を語るときの内容の乏しさ、態度の虚しさも、そのあたりとの関係で考える必要があるだろう。KN(1)はそのあたりを「教育の問題」とはっきり指摘していたが、彼がそう語れるのは、一足先に帰国し、戦後「傷痍軍人」として生活した経験があるからなのかもしれない。

2-2-3 参照点としてのSH(10)の位置

既に述べたように、SH(10)は、上記の分類——軍隊経験「有」「無」の中間的ポジションにある。それは年齢的なものでもあるが、それに加え横浜で暮らしたことが、彼の「語り」をほ

かの9人とは、全く異なるものとしている。戦時下でありながらある程度の時期まで英語を学び、戦後それを武器として駐留米軍の中で職を得る。Z H(5)も戦後エンジニアとして米軍で働いているが、その「語り」とは異なり、その交流の描写は克明である。

他の9人（当時小学生であった「無」の人々も含め）の「厳しかった戦時経験に比して、まるで余生であるかのように語られる戦後」に対し、S H(10)はまさに戦後社会の中を主体的に生きた。このコントラストの中に「戦争体験談」の大きな課題を見出だせると同時に、我が国の戦後社会がまさに「都市社会」（相対的に、伊勢原のような地域がその「郊外」）として構築されていく歴史の端緒を感じる。

S H(10)の「語り」をもとに都市生活者（とりわけインテリ層）の戦時体験には、全く別のものがあつたであろうと想像し、伊勢原の本事業の資料を相対化して扱うことができる。その意味は決して少なくない。

2-3 いくつかのトピックについて——共通質問をめぐって

〈戦争と情報、メディア〉

戦時下の情報については、厳しい統制下にあつたと考えるのが一般的である。しかしそれはそう単純ではなさそうである。T Y(3)が所持していた雑誌や、ラジオといったメディアは日常生活に定着しており、偏っていたにしてもそれなりの情報はあつたようなので「枯渇」感はなかったようだ。この時代はメディアからの情報よりも狭い人間関係を通じて流通していた情報が力を持っていたと考えられ、その点でいえば「情報」は常に「規範」「規律」を纏って存在していたということが言える。

10人の「語り手」に我々は共通質問として、「終戦の日」について記憶していることを訊ねた。「玉音放送が終戦を告げた」という通説の事後構築性については、既に佐藤卓己が『8月15日の神話』（ちくま新書、2005）で暴いてみせたが、しかし「では、実際に庶民はどのようにして、何を知ったのか」についてはまだまだブラックボックスの中である。K（YM(2)）家のように父親が間違って解釈し周囲に伝えたという“漫画のような話”や、K F(8)が言うように「（兵隊の噂として）既に知っていた」ことが事実だとするならば、そのインパクトは皆がラジオに向かって頭を垂れる図のようなものでなかったことは、推して知るべしだろう。

一方、非常に興味深いのは、戦地でどのようにして終戦を知ることができたか、である。捕虜となっていた前場以外も、Y T(7)、K M(6)は「通信兵」であつたことからかなり早い時期に知りえていたようである。それが公式情報か「噂」のレベルかはあるが、いずれにしても当時の情報管理のある種の「緩さ」を彷彿とさせるような話である。

〈衣食住と生活規範、コミュニティと“祭り”〉

今回のインタビューでは、戦時経験を「異常体験」ではなく、日常と接続した意識として拾い出すことを目標にしていた。そのために（例えば「講話」などで語りなれた話をし始める前に）インタビューの冒頭では「家族」や「日常生活」に近い質問を重ねたが、そのことによって「語り手」に戸惑いが生じ、出来上がった「講話」のストーリーが崩れ、「普段、話したこ

ともないこと」(KN(1)「自分が養子であったことは、誰にも話していない」)や、残酷ともいえるような生々しいエピソード(YT(7)「人肉食」など)をしゃべりだす結果を生んだ。

「家族」の話は、話者によって濃淡があった。YM(2)にとっての父親の存在は特に顕著であるが、それ以外の人にも兄弟による序列意識は時々顔を出していた。復員者にとっては、また家族は安らぎの場でもあった。「衣食住」の話は「儉約」という規範意識と強く結びついていた。特に「食」は当時の生活の貧しさの記憶を象徴していたが、しかしそれだからと言って、豊かになった今日の生活については、あまり肯定的には語られない。その「貧しさ」自体が、ノスタルジーの対象となっているかのようでもあった。

「祭り」についても、娯楽の少ない時代の代表的な楽しみである一方、コミュニティ儀礼としての側面が語られていたように思う。「祭り」といえば「村芝居」が想起されることが、まだメディアが未成熟な時代の特性として興味深い。

〈今後の日本について期待していること、不安なこと〉

最後に、行ったこの質問については、社会の「戦前化」を心配する声が少なからず発せられた。しかしそれよりも現代の若者の「規範」「秩序」意識の欠如への憂いが前面に出ており、そこから「命の大切さ」「人と仲良くする」～「平和をもとめる」といったややナイーブな論理の展開になっていたように思う。

ほとんどの語り手は「戦争に反対」していた。しかし異文化を理解する(YM(2), SH(10))こととその発言が結びついていたことは稀で、「国のために尽くしてほしい(KM(6))」という「戦前のフレーズ」や「つまらん理想をもたずに(ZH(5))」といった、若干矛盾するような言葉が、それと合わせて発せられていたケースも少なくない。

2-4 戦後世代との大きなギャップ

〈伝承されていない「戦時」を語ることば〉

本事業におけるインタビューで、当初最も苦戦したことは、「会話がつながらない」ことであった。学生たちはそれなりに予習し、質問を準備してきたにも関わらず、その質問への答えに対し、さらに重ねてシナリオになかったような問いをその場で重ねていくことが、当初は全くできなかったのだ。その理由としては、インタビュースキルの未熟さももちろんあるが、「語り手」の言葉が十分理解できていなかったことが何よりも大きい。

特に軍隊経験「有」の人々が発する戦時下特有の言葉を聴くことはほとんど未経験であっただろう。もちろん部隊名や中国、南方の地名はわからないでも仕方がないが、「出征」「志願」「召集」「除隊」といったボキャブラリーあたりからまず躓いていた。軍隊経験「無」の人々が語る「銃後」の生活についても、例えば「一丁」「一合」といった古い計測単位や、「旧制中学」「尋常小学校」などが入ってこない。もちろん伊勢原の地名や、「先導師」などこの地域に独特のことがらへの知識のなさも壁となっていた。

しかし、インタビューの数を重ね、書き起こし作業を、時間をかけて行うことによって、また「語り手」の中でも丁寧に「言い換え」をしてくださる方もおり、そのギャップは少しずつ

解消されていき、何人かの学生は、単に質問を繰り返すにとどまらず、「キャッチボール」の域に進めるようにはなっていた。

〈戦前に生きた人々との心理的なギャップ〉

今回学生が作成した質問表には、特に軍隊経験の「無い」、戦時期比較的若かった「語り手」に対して「当時の遊び」「当時、流行っていたもの」を訊ねる項目があった。また軍隊経験者には「早く戦争が終わってほしいと思わなかったか?」と問い、両者に共通する質問として「戦争が終わって何がしたいと思いましたか?」「当時の将来の夢は?」を彼らは聞いた。

これらの質問が、実は最も「語り手」たちを戸惑わせた。子供であれば「遊び」こそが毎日の生活の中心であり、「楽しい」ことを優先させて考えるという若者たちの「常識」。あるいはメディアが創り出す「流行」を追いかける行動様式——それらを聞かれて、「語り手」たちは一様に戸惑いを示した。“三つ子の魂、百まで”ではないが、「語り手」も70年、戦後社会に生きてきたにも関わらず、質問を受けて「そうした感覚」が自身にないことに改めて気づいた様子であった。

特に学生たちは、「終戦」が「人々が自由に希望を口にする」転機となったとの答えを期待していた。しかし帰ってきた言葉の大半は「茫然自失」あるいは「何も考えられない」といったものだった。暴れたり、荒れたりといった行動もあったという。それよりも（むしろ戦中より）貧困状態は厳しいものになったという点もあっただろう。いずれにしても価値観や生活様式の転換は、並大抵のことではない。

学生たちは「成人式」のことを聞きたがった。自分たちにとって身近な「儀式」だからか、あるいは「戦争」という異常事態から「社会的責任」の意識に関心が広がり、そのあたりから「子どもから大人への、意識の変化」を探りたいと考えたからだろうか。しかし、この質問も「空振り」であった。「語り手」たちは子どもの頃から規範に縛られ、（特に女子は）ある意味「早く大人にさせられて」いた。男子にとって「徴兵検査がそれにあたる」との答えは、なるほど説得力があった。いずれにしても当時の「大人になり方」は、今日のそれとは大きなギャップがある。

3. 「語り」を広げる——ワークショップという試み

3-1 ワークショップの狙いと成果

「戦争体験インタビュー映像を用いたワークショップ事業」は、2016年6月に大学側から伊勢原市へ、インタビュー映像の活用企画の一つとして提案され、第30回平和の集いの展示コーナー開設に合わせて8月20日（土）13:00～15:00、伊勢原市民会館会議室にて実施された。

当初は「2015～16年に収録した戦争体験者インタビューの映像と書き起こし原稿から、ディスカッション・ポイントを抽出し、大学生のファシリテーションのもと、中学生から体験者に至るまでの幅広い年代の市民が率直に語り合うことによって、戦争が内包する問題を深く考える機会とする」（事業提案書より）ことを目的に準備を進めてきたが、残念ながら参加申込者

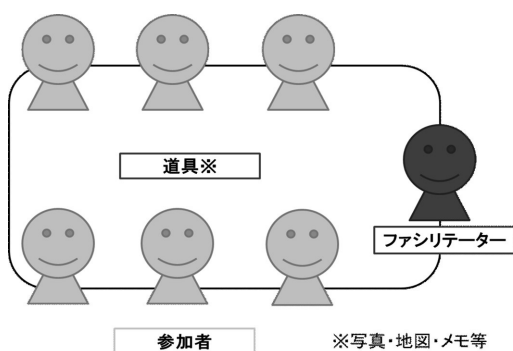
(9名)は全員70代以上であった。しかし1941～3年生まれで、ご自身は直接の記憶を持たない方々もあり、むしろ微妙な年代差の中で経験と記憶をシェアする場として機能したように思う。

ファシリテーターを務めた学生は、インタビューを担当したチームとは別班で、写真や映像記録の活用、特にワークショップの企画運営を中心に活動をしてきたメンバーで、2015年度には平塚市の依頼で行った平塚市中央公民館・市民大学講座「戦争を語り継ぐために」で平塚空襲の遺構を地図と写真で辿るワークショップも経験していた。彼らはこの参加者層の変更に対応し、自らの立ち位置を「会話回し」から「聞き手」にずらすことにした。その結果、ある程度進行は参加者同士の自由な対話に委ねることとなり、予想以上のトピックと生きた言葉を引き出すことができた。

3-2 実施概要

本事業のワークショップは以下の手順で進められた。

- ① 映像上映(約20分): YM(2)(2015年収録), KF(8)(2016年収録)のインタビュー映像を本ワークショップ用に編集し上映。書き起こし原稿も配布し、メモを取って見ることを促す。
- ② 映像を見て気づいたことをきっかけに、班ごとに対話(40～50分)。当初は、ファシリテーターが以下のキーワードをスケッチブックに用意し、それについてポストイットでメモを張りつけ、キーワードに引き付けて語っていただくことを目論んでいたが、各班とも年齢が近いこともあって参加者が比較的自由に言葉を発した。キーワードは会話が途切れた時に用いた。
- ③ 各班発表(30分)。ファシリテーターが行う。
- ④ まとめ(10分)。水島が行う。



ファシリテーターとしての役割

参加者が自ら参加・発言することでグループの中で何かを学びあったり共感しあえる環境を作る

【キーワード】

「地域のこと：疎開」「当時の暮らし：食生活」「終戦の日」、「戦時下の言葉」、「女性の立場」

3-2 各グループの「論点」と「コミュニケーションの広がり」

グループと参加者は以下の通り。各グループにおける発話を、「事実系」「解釈系」に整理を試みる。

【第一グループ】

HTさん 1941年生まれ 石川県金沢近郊出身
 KFさん※ 1933年生まれ 神奈川県伊勢原市出身
 SMさん 1936年生まれ 埼玉県行田市出身

○主な「事実系」発言

- ・防空壕の記憶がある／ない。
- ・学校に兵隊がいた。・戦争ごっこをした。
- ・都会から買い出しに来る子供に石を投げて遊んでいた（親の影響か）。

○主な「解釈系」発言

- ・当時、親は子供の食べ残しで食事を済ませたが、現在は捨てる。今は贅沢すぎる。
- ・静かな田舎な土地で、(映像)をみて伊勢原ってあんなに大変だったんだと感じました。
- ・疎開先である伊勢原の人たちは冷たかったとあるが、疎開を受け入れていた伊勢原住民がどれだけ苦労したのか記録から発掘したいが、伊勢原には何にも記録がない。

※KFさんはインタビュー映像の本人

【第二グループ】

WKさん 1943年生まれ 埼玉県浦和市出身
 MEさん 1936年生まれ 北海道芦別市出身
 KYさん 1933年生まれ 長崎県出身

○主な「事実系」発言

- ・終戦後はなんでも配給で物がなかったが、北海道はジャガイモやカボチャなどが多かった。
- ・終戦後は家がなく抽選で決められていた。
- ・牛乳や砂糖は一切なく、甘いものは人工甘味料のサッカリンを食べていた。
- ・給食の時、栄養不足防止のため肝油を飲まされていた。
- ・米、魚類、肉類などの食糧から衣類まで軍隊に渡っていたため、一般国民に回らなかった。

○主な「解釈系」発言

- ・当時の教育は今とは違い、将来の夢を聞かれると海軍大将などと答えるように教育された。
- ・戦争に負けてよかった。8月15日は敗戦の日にするべき。負けたことで学びがあった。

【第三グループ】

KNさん 1923年生まれ 厚木市出身
 OIさん 1930年生まれ 広島出身
 TMさん 1942年生まれ 東京都浅草出身

○主な「事実系」発言

- ・19年4月まで英語の授業があった。
- ・軍役につかない職業のひとがいた。
- ・電線にヒトがぶら下がっていた（東京大空襲）。
- ・疎開をした人はもらい風呂だった。

○主な「解釈系」発言

- ・戦後は、誰も住めない土地を買って金儲けした人とか、生命力があった。
- ・今思えばバカみたいなこと。
- ・絆が大事。

3-3 ワークショップを実施して

当初の狙いであった「幅広い年代」が、戦争を語る映像をきっかけに語り合う場は作れなかったが、むしろ年代が近く、また最も若い層が「戦前生まれでありながら、記憶が定かではない」世代であったことが功を奏し、また出身地も北海道から九州、そして都市空襲や被爆経験、さらには軍隊経験をもつ人までのバリエーションがあったことから、「互いの記憶、解釈を重ね合わせる場」として機能した意味は大きい。記憶は一気に遠く離れた世代に引き継げるものではない。その点でいえば、今回参加した70代が「戦前～戦後」をつなぐ世代として、今後大きな役割が期待される人々である。

また、ファシリテーターが「座回し役」から「聞き手」に徹する形になったことも、結果としてはよかったのではないだろうか。ワークショップの参加者たちは、互いに記憶や考え方を確認しながらも、どこかで「聞き手」である学生に向かって語っているという意識を持っていたように見えた。

ワークショップは、参加者の層、提示する参照項（今回の場合インタビュー映像）で内容が一変する。今回の結果に満足せず、異なる場、参加者で、何度か実践を積み重ねる必要があることを痛感した。

4. 中間総括——一連の「平和事業」を通じて、考えるべきこと

インタビューからワークショップへのこの事業の展開を通じて、改めて突き付けられたことは、「体験者の数だけ、戦争体験がある」ということである。戦争体験を「継承」目的だけに矮小化し、個々の小さな声の差異、あるいは一つの声の中に隠されている図と地、その矛盾や背景の無意識、イデオロギーの縛りなどに注ぐ目を失ってしまえば、それこそこれらの事業は、本来の目的と逆の方向に進んでしまうリスクすら孕んでいるとさえいえる。

2016年から17年にかけて、映画『この世界の片隅に』（片渕須直監督、こうの史代原作）が大きな話題となった。これまでの「戦争映画」とは一線を画す庶民の目線、戦時期の「日常」の描写に、多くの観客が目を開かれた⁷。本事業のコンセプトは、この映画と基本的なスタンスにおいて共有しているものが少なくない。しかし、この映画にも重大なリスクが潜んでいる

——主人公「すすさん」は、あまりにも純粹無垢な人間として描かれすぎているのではないか？——この伊勢原の事業を通じて、考え続けてきたことは、こうした「日常に埋もれる、純粹さ・真面目さ」の罪である。あの時代、戦争に向かう流れを許したのは、間違いなくその時代に生きた一人ひとりの人間の思考・行動の集積なのである。彼らは「物言わぬ砂粒」となることで、自身が逃れられない「アリジゴク」にはまることになってしまった。そのことは決して忘れてはいけない。

「戦争を語ること」の意味は、まさに「そのすり鉢の底」に落ちないためにある。「事実とはなにか」「何が正しいか」を究明すること（言い換えれば「正史」の伝承）ばかりに目を奪われると、そこにはまた暗黙の「口封じ」の圧力が生まれる。インタビューやワークショップといった場や、そこで必要なスキルが、世代を超えた「自由な発話」をもっと、さらに社会に広げていくための一助になればと願わずにはいられない。

註

- ¹ 伊勢原市は市政15周年の1986年を機に「健康・文化都市宣言」を発表し、同年が国際平和年であることに合わせ翌1987年に第一回「平和のつどい」を開催。最初の「講話会」はそこで行われた。
- ² 従軍慰安婦問題をめぐる「吉田清治証言」などがその例。
- ³ ブーニュー『コミュニケーション学講義』（2010、書籍工房早山、水島監訳）p.70
- ⁴ 水島久光「『記憶を失う』ことをめぐって—アーカイブと地域を結びつける実践」（『ライブラリー・リソース・ガイド』第3号、2013、アカデミック・リソース・ガイド株式会社
- ⁵ 例えば、戦後60年の2005年8月29日に放送された『広島・昭和20年8月6日』（遊川和彦脚本、松たか子主演、TBS）などはその典型。この年は、広島の爆心地付近の街並みの再現プロジェクトなどが話題になった。
- ⁶ 2017年度の伊勢原市との共同事業においては、別事業として実施してきた「中学生ヒロシマへの旅」の事前授業としてこのワークショップが企画されている（7月28日実施）。
- ⁷ 例えば「『この世界の片隅に』は宝——「実写以上に」戦時中の日常を描ききっている！ 富野監督が片渕監督に伝えたかった言葉とは？」（ダ・ヴィンチ・ニュース、2017年3月10日）など。
<https://ddnavi.com/news/358610/a/>